

逆接の接続助詞

—— 「ケド」「ノニ」「クセニ」 ——

原 田 登 美

1. はじめに

- (a) 知っているけど教えなかった
- (b) 知っているのに教えなかった
- (c) 知っているくせに教えなかった

(a)～(c)の「ケド」¹⁾「ノニ」「クセニ」²⁾ はいずれも一般に逆接の接続助詞と認められているものである。それぞれの接続助詞で結ばれる従属節内部の表現内容を前件、主節の表現内容を後件と呼ぶ時、話者は使用する接続助詞によって前件と後件をどう捉えているかを表し、聞き手は前件の内容から後件の意味を予測することができる。

(a)～(c)は、話者が前件から導く帰結が実現しないことを後件で述べる時の関係文であることから、前件と後件は「逆接」関係にあると言える。また前件で述べられた事柄が後件で実現しなかったという事実関係を表す意味から、(a)～(c)は「逆接」の「確定」関係にあると言える。

本稿では、(a)～(c)の逆接の接続助詞を、話者が前件と後件を否定的に関係づけて捉えた表現と位置づける。前件と後件を否定的に関係づける³⁾ という意味においては、(a)～(c)は共通であるが、それぞれの接続助詞はまた互いに置き換え不能の固有の意味・用法を持っている。互いの特徴が、前件と後件の意味関係・論理関係においてどのような異同として現れるものなのか、その際に話者の事柄に対する心的態度はどのように文と関わるのか、といったことを検討し(a)～(c)の意味用法を考えるのが本稿のねらいである。

2. 〈否定的累加関係〉と「ケド」「ノニ」「クセニ」

2.1 「ケド」への「ダロウ」接続

推量形「ダロウ (デショウ)」は、「ケド」「ノニ」「クセニ」の前件において次の(1)(2)のように「ケド」のみに接続し、「ノニ」「クセニ」には接続しない。

- (1) 「もうそろそろみんなも来るでしょうけど……もう少し待ってね」 (渡る)
- (2) 「この家あてにして帰って来ただろうけど、あんたは、この家捨てて出ていったの」 (渡る)

「ダロウ (デショウ)」の「ケド」への接続には、上記(1)(2)のように「来る」「来た」の

「ル形」と「タ形」の分化が見られる。「ダロウ (デショウ)」は、既に実現した事柄であっても未実現の事柄であっても、話者の推量という述べ方によって事柄の成立を述べる。「ダロウ」の推量表現とは、「ダロウが主観性の強い表現だということは、(略) ラシイやヨウダと違って、判断の客観性を相手にほのめかすという意識がないという点にも現れている。(略) ダロウという形で推量の表現をするのは、その根拠が各個人の知識や経験だけによる場合で、その点で結局は確言的な断定のダと大して変わらないともいえる。」(寺村1984:229) や、「話し手ははっきりこうと言い切ることを差しひかえて、断定を保留するときに用いる言い方である。」(森田1989:594) と説明されるように、「ダロウ」は推量という意味によって断定を回避する作用を行っている。

「ダロウ形」が「けど」に接続する時、話者は前件の述べる事柄や状況について、次の(3)～(5)のように話者の見解を提示する。その提示のしかたは「ダロウ」という推量という形式によって断定を避ける表現形式をとる。「ダロウ」の意味作用を機能させて前件を提示するのである。

(3) 「私も望も、あなたが頼りなのよ。そりゃあ、ショックだろうけど、我慢してお勤めしてもらわなきゃ……。」 (渡る)

(4) 「そりゃ、あんたの勝手だろうけど、たかがラーメン屋の娘が、私立の女子中へ行くなんて、身のほど知らずもいいとこじゃないか。」 (渡る)

(5) 「そりゃあ、何年か前の景気いい時なら、新しいことしたって、成功する可能性もあったでしょうけど、今はもう、そういう時代じゃないんです。」 (渡る)

(3)～(5)の後件においては、前件で示した話者の見解とは異なった側面・見方によって、前件と同じ事柄についての話者の見解が示されている。すなわち、「ある事柄について前件で一つの側面・見方を認めた上で、それとは異なる別の側面・見方もあることが後件で述べられている」。このような前後件の意味関係は、〈否定的累加関係〉⁴⁾の一つとして捉えられる。〈否定的累加関係〉とは、「後件において、前件の内容に関する別の側面や否定的な解説を付け加えるときに成立する」(佐竹1986:173)。例えば、(3)では、話者は前件において、ある一つの事態を「ショックだ」と捉え、後件では同じ事態を「我慢してお勤めしてもらわなきゃ」という事態と捉えている。つまり、前件で〈XハPデアル〉と述べ、後件では〈XハQデモアル〉と続けてPとQの相反する否定関係に注目して「～けど～」と表すのである。

前件と後件が(3)～(5)のような〈否定的累加関係〉の意味関係にある時、前件で話者の見解を提示する形式として、「ダロウ」という推量としての断定回避表現は重要な意味機能を発揮すると見られる。

次の(6)の文においては、「と思います」は「だろう」と同じ意味で機能している。

(6) 「信じていただけないと思います(=だろう)が、私はいやになるほど常識的な人間なのです。～」 (岸辺)

話者は、前件で、「と思います」によって、話者の事態に対する一つの注釈を断定回避的に提示している。そして、後件では、前件の「信じている」という内容とは相反する「私は常識

的な人である」という見解を累加して述べている。

「ダロウ」も「と思います」も、後件で展開する前件への否定的見解に対する、ある評価・注釈・見方・見解を前触的に婉曲な方法で述べているという点では同質なのである。

〈否定的累加関係〉において「ケド」に接続するのは「ダロウ形」ばかりではない。次の(7)～(9)のように、述語には「ル形」「タ形」のいずれもが肯定・否定形のいずれによっても現れる。

(7) 「息子のことはよく分からない。分からないけど、たしかに、家族への関心が薄いことは事実だ。」 (岸辺)

(8) 「遊ちゃんの前では言えないから黙っていたけど。私は反対よ。～」 (渡る)

(9) 「お父さんてさ、冷たい人だって恨んだけど、お父さんが私を追い出すには、それだけの理由があって～。今はそれを有り難いと思っている。～」 (渡る)

(7)の前件は、父親の息子についての感想である。父親は前件での感想に加えて、後件で「(息子が) 家族への関心が薄いことは事実だ」との否定的な味方を追加して述べている。(8)では、ある事件について、前件で「黙っていた」との話者の態度説明が行われている。その後で「。」によって文は切れた形になってはいるが(これは話しの休止と解釈される符号である)、後件に「反対だ」との話者の見解が続けられていると理解される。後件は前件に対して否定的見解を加えたことから、「ケド」という逆接の接続助詞で結ばれているのである。(9)では、前件での「お父さん」について「冷たい人だって恨んだ」という見解と、後件の「有り難いと思っている」見解は意味的に対立するものである。後件は、前件の内容の意味を否定するものとして捉えている意味で、前後件は否定的関係にあると言える。それゆえに逆接を表す「ケド」が用いられるのである。

2.2 「ノニ」「クセニ」と〈否定的累加関係〉

以上の(1)～(9)は全てが(a)～(c)の中で、「ケド」のみにおいて成立する文であり、「ノニ」「クセニ」においては不自然な文となる。しかし、〈否定的累加関係〉であれば全てが「ケド」においてのみ可能になるわけではない。次の(10)(11)は、〈否定的累加関係〉と考えられるが、「ノニ」「クセニ」においても可能な文である。これは、前件と後件に推論的因果関係が認められる場合だからである。

(10) この料理はまずい {けど／のに／くせに} 見た目はきれいだ。

(11) シャれた洋服を着ている {けど／のに／くせに} かなりの年だ。

(10)(11)の文には、前件と後件の間に、次の(d)のような一般的推論が働くと解される。

(d) 「(料理は) まずければ見た目は良くない」「シャれた洋服を着ていれば若い人だ」

前件と後件に(d)のような何らかの推論的因果関係が認められ、一般的推論が働く場合には、次の(12)(13)のように、「けど」「のに」「くせに」のいずれもが可能となる。(以後、出典の原文に用いられている接続助詞には下線を付して示してある)

(12) 「長いおつきあい {だけど／なのに／なくせに} 私は最終学歴とかそういうことを人

にきかないし、あなたにもきかなかった。」 (向田)

- (13) 「しょっちゅうおしゃべりしている仲 {だけど/なのに/なくせに} あらためて対談
となるとやりにくい。」 (向田)

また、前件と後件の間の推論的因果関係が、推論の帰結として不自然で不明瞭な次の(14)(15)のような〈人柄が良ければ仕事が早い〉〈勉強がよくできれば体が丈夫だ〉の場合には、〈否定的累加関係〉であっても、「ノニ」「クセニ」の使用には疑問が出てくる。しかし、「ケド」は自然文となる。

(14) 太郎は人柄がいい {けど/?のに/?くせに} 仕事が遅い。

(15) 次郎は勉強がよくできる {けど/?のに/?くせに} 体が弱い。

(14)(15)の「ケド」が自然であるのは、(14)を例に取るなら、(14)には次の(e)の順接関係が対応しているのであり、「ケド」は(e)の二つの事柄に因果関係は有せず、単に(e)の順接関係に対応した否定的関係として捉えているに過ぎないからである。

(e) 太郎は人柄がよくて仕事が遅い

また、上記(12)においても「ケド」で関係付けられる場合には、前後件に次の(f)の順接関係が認められる。

(f) 「(私達は) 長いおつきあいで私は最終学歴とかそういうことを人にきかないし〜」

しかし、「ノニ」「クセニ」の成立には、前後件の間に

(g) 「P (前件) ナラバQ デアルガシカシ 事実 R (後件) ダ」という因果関係・結果が必要である。ただし、Qは文面に明示されないことが多い。

次の(16)~(18)は、前件についての否定的な見解を、後件で、疑問形式「ハタシテ〜カ」「ホントウニ〜カ」や、提案の形式「〜ホウガイイ」で示しているものである。これらも、〈否定的累加関係〉と捉えられるが、前後件の間には上記(g)の関係が認められず、「ノニ」「クセニ」は成立せず、「ケド」のみが自然な文となる。

(16) 役人は窓口勤務の特別手当をもらっている {けど/*のに/*くせに} これは果たしていいのだろうか。

(17) 「〜私も今まで酸性食品は体にいいって漠然と考えていた {けど/*のに/*くせに}
本当のところはどうなのかしら……」 (美味)

(18) 「久子さんは定休日作ってくれてって言ってる {けど/*のに/*くせに} 私はない方がいい。」 (渡る)

2.3 「ケド」前件の蓋然性表現としての「ダロウ」

話は逆戻りするが、「ケド」へ接続する「ダロウ」の意味を、違う角度からさらに考えてみる。「ダロウ」には、大きく分類して次の(h)のa, bに示されるような二つの意味がある。

(h) a. たぶん、みんな来ただろう。(Perhaps, everybody came.)

b. ほら、みんな来ただろう!。(Look! Everybody came, didn't they?)

aは、「来ただろうと思う」に置き換え可能な蓋然性を表す助動詞である。一方、bは「話し

手の発話内容に対して、聞き手もすでに情報を持っている、ということを前提として、その確認をする」という意味であり、「来ただろうと思う」に置き換え不可能なものである（森山1989, C: 101）。前述の〈否定的累加関係〉である「ケド」の前件に現れる(1)～(6)の「ダロウ／デショウ」は、全てaの意味である。したがって、事態成立の蓋然性に関わる次の(i)のような副詞と共起する。先に示した文(1)を例にとって考えると、

- (i) 「確かに／やはり／きっと／恐らく／多分／多分に／もしかしたら／ひよっとする
と} もうそろそろみんなも来るでしょうけど……もう少し待ってね」

「ケド」の前件において、話者は文成立の条件を設定し提示するのであるから、聞き手に確認を求める意味での「ダロウ」を用いることは考えられない。aの蓋然性の意味でしか用いることはない。

aの蓋然性の「ダロウ」は、次の(j)の「みんな来だろう」という文に見られるように、疑問詞とは共起しないし、疑問文になることはないのである。

- (j) *どうしてみんな来だろうか⁵⁾。

「ノニ」「クセニ」の場合は、(h)のa, bの両方の意味において、「ダロウ形」が接続することはなく、「ケド」においてもaの事態成立の蓋然性を表す意味の「ダロウ」しか接続しない。また、「ノニ」「クセニ」は、前件の内容を事実と認定したところに成り立つ文であるから、前件の文末に蓋然性の「ダロウ」を伴うことはない。前件を事実と認定するところに、推量を働かせる余地のないのが「ノニ」「クセニ」の接続的特徴であり、これが「ケド」とは大きく異なる点である。(a)～(c)の接続助詞で結ばれた文というのは、前件で話者の条件を設定して後件との関係を問うという文であることから、前件において述べられる事柄は事態の成立に関して疑問を持ったり、聞き手に情報を要求するような文であってはならないのである。

3. 〈否定的継起関係〉と「ケド」「ノニ」「クセニ」

「ケド」が「ノニ」「クセニ」と置き換えられない時、その前件と後件の関係には、上述の〈否定的累加関係〉の他には継起的な関係がある。すなわち、「前後件が時間的順序に従って起こる事柄で、後件に継起する動作・状態が前件の表す状態を否定するものとしてとらえる。」（佐竹1986: 171）もので、次の(19)～(21)に見られる場合である。佐竹はこの関係を〈否定的継起関係〉と呼んでおり、本稿においてもこれに倣う。

- (19) (玄関で) 靴をはいたけどすぐ忘れ物に気がついた。

- (20) 「～この土地だって、家だって、今は私の名義だけど、いつかは亨のものになるの～」
(渡る)

- (21) 暫く通学路を歩いたけどいやになって横へそれた
(岸辺)

〈否定的継起関係〉においては、(19)を例に取るなら、次の順接関係(k)に対応する。

- (k) (玄関で) 靴をはいてすぐ忘れ物に気がついた。／(玄関で) 靴をはくとすぐ忘れ物に気がついた。

(k)においては前件と後件が継起する事柄として順当に捉えられている。しかし、(19)にお

いては、「靴をはいた」結果実現する状態の〈外出〉に対して、後件の「すぐ忘れ物に気がついた」が話者によって否定的に捉えられている。したがって前後件の二つの事柄は、〈否定的継起関係〉として「ケド」によって結ばれているのである。話者の立場や態度によって、時には、(k)のように肯定的に関係付けられたり、時には、(19)のように否定的に関係づけられたりするわけである。

(19)～(21)において、前件と後件の関係は時間的順序に従った動作や状態の継起関係である。このような、単なる継起関係には、2.2で既述した(g)の「P(前件)ナラバQデアルガシカシ事実はR(後件)ダ」という因果関係は見られない。したがって(22)のように「ノニ」「クセニ」との置き換えはできなくなる。

(22) (玄関で) 靴をはいた {けど／*のに／*くせに} すぐ忘れ物に気がついた。

しかし次の(23)のように、前件「喧嘩した」と後件「すぐ忘れた」との二つの述語の間に、「(一般に) 喧嘩したばかりであればすぐに(喧嘩したことは) 忘れられない」という推論が成り立つ場合には、事柄の継起関係であっても「ノニ」「クセニ」は可能である。

(23) 喧嘩したばかりなのに、そんなことはすぐ忘れて、渋谷まで来て、「先に帰れ」と言っても怒らないのだ。 (岸辺)

(23)においては、「ケド」も可能である。

以上は「ケド」が成立する〈否定的継起関係〉文において、「ノニ」「クセニ」が不成立になったり不自然になったりする場合を、前後件の意味や因果関係との対応において見てきた。

4. 〈対比関係〉と「ケド」「ノニ」「クセニ」

次に、〈対比関係〉において「ケド」「ノニ」「クセニ」を考えてみる。

(1) 兄は太っている {けど／のに／くせに} 弟はやせている

(m) 兄はよく食べる {けど／のに／くせに} 弟はあまり食べない

上の(1)(m)は対比・対照を表し、二つの事柄について、一方は成立しても一方は成立しないという意味において「ケド」「ノニ」「クセニ」は共通している。前件と後件の相反する事柄が、(1)では「太っている」の対義語としての「やせている」によって否定され、(m)では「食べる」の否定形としての「食べない」によって二つの事柄は対立していると認められる。既に述べたように、「ケド」の前後件は順接「～テ～」に対応するものであり、(1)の文でも次の(n)のように、

(n) 兄は太っていて弟はやせている

と、兄弟を対比的に捉えると同時に、次の(o)のように、一人の人間について二つの状態が併存していると述べることもできる。

(o) 兄は太っているけど背が高い

兄はよく食べるけどよく動く

一方、「ノニ」「クセニ」では上記(1)(m)においても単なる対比・対照の意味には終わらない。例えば(1)の文で言えば、次の(p)のように、

(P) 兄が太っている {のに／くせに} 弟がやせているのは {意外だ／おかしい／不思議だ
／驚きだ／どうしてか。}

といった、話者の予測や予期が現実とは違っていた、という不満や非難などの気持ちが含意として現れるからである。したがって、「ノニ」「クセニ」においては(24)(25)のように、

(24) 「何だ！、日本人 {なのに／のくせに}、漢字を知らないのか」

(25) 「もうまったく！ ちゃんと言えばいい {のに／くせに} 何ということだ」(美味)
期待はずれや不平・不満などを表す「何だ！」「もうまったく！」といった表現と共に起す。上述の(24)(25)の文では、「ケド」を用いることはできない。

5. 「ケド」と「ノニ」

5.1 「ケド」に置き換えられない「ノニ」

「ノニ」と「クセニ」の違いについては後述することにして、ここでは「ケド」に置き換えられない「ノニ」について考える。

「ノニ」の推論的背景となる因果関係は、話者が予期に反する現実に出会った時、順当な論理関係から外れて、「えっ」「まさか」などの驚きや「どうして」「なぜ」などの疑問となって表出する。したがって、次の(26)～(28)のように、「えっ」「あれっ」「やだ」などの驚きを伴った表現や、「どうしたの」「どうしたかしら」などの疑問表現としばしば共起する。驚きと疑問とは連続しているのである。(26)～(28)は〈文末「のに」文〉⁶⁾の中の倒置的用法であり、意外感や驚きや疑問が先行して表出した文である。(原田1997:53)

(26) 「えっ、迷惑ですよ、あの人たちだってせっかくの日曜日なのに……」 (渡る)

(27) 「あれ、みんな、どうしたの。さっきまでそこにいたのに……」 (宙太郎)

(28) 「やだ、どうしたのかしら。ちゃんと虫干して、しまっといたのに……」

(24)(25)や(26)～(28)のような「ノニ」は、上述の(P)文の論理構造と含意を示すものであり、「ケド」に置き換えることはできない⁷⁾。

5.2 〈「ノニ」の後件情意文〉

「ノニ」には次の(29)～(31)のように、後件に事柄の結果事態を述べず、(29)の「申し訳ありませんでした。」や、(30)「物好きな……」のような話者の心情を述べた〈後件情意文〉(原田1997:58)として用いられる文がある。

(29) 「いろいろお世話になりました。こちらからご挨拶に伺わなきゃなりませんのに、申し訳ありませんでした。」 (渡る)

(30) 「どこ行くんだ」

「絵馬堂」

「この寒いのにお前も物好きな……」 (宙太郎)

(31) 水上「年とるほど、おやじに似たしぐさをする。」

向田「そうらしいです。煮ものの味が母親に似てくるんです。別に習わないのに不思議

議なことですわねえ。」

(向田)

〈「ノニ」の後件情意文〉とは、話者の心情が、前件と後件の結びついた全体に対して表現された文と考えられ、後件に示されるはずの結果事態は明示されず、直接話者の心情が後件として続いている文である。〈「ノニ」の後件情意文〉である(29)～(31)の場合も、「ノニ」を「ケド」に置き換えることはできず、たとえ置き換え可能な(32)のような場合においても、その含意は異なったものとなる。

(32) 日本代表コーチが言った。「五輪には最高の審判がいると思った {のに/けど} 残念だ〜。」
(「朝日新聞」)

(32)において「ノニ」が用いられた場合には、自分には論理的妥当性があったはずだし推論の裏付けを持っていた。にもかかわらず結果は、自分の推論通りにはならなかったという自己の論理性を否定された無念さがニュアンスとして表出する。一方、「ケド」では自分が予想していた結果には至らなかったという、結果の不成立に対する残念さを叙述するのみであり、論理的推論的背景があったとは感じられない文となる。

6. 「ノニ」と「クセニ」

6.1 「クセニ」の成立条件

「～ {バ/タラ/ト} イイ」は複合述語形式として、仮定した事柄に対する話者の当為判断を表す。この場合当為判断とは、適当・願望・提案などの意味であるが、この複合述語形式は下の(9)に示されるように、「ケド」と「ノニ」には接続するが、「クセニ」へは接続しない。

(9) (家へ) 帰ったらよかった {けど/のに/*くせに} 帰らなかった。

「～ {バ/タラ/ト} イイ」の複合述語形式は、「ノニ」の前件においては次の(33)～(35)のように自然な文として認められるが、「クセニ」の前件では許容されない。

(33) 「(二人で) ホテルまで行けばよかった {のに/*くせに}, ぼくが変なことを言ったから (ホテルまで行かなかった)」
(君を)

(34) 「魚が釣れなかったら自分で何か買って来てくれたらいい {のに/*くせに} ……」
(美味)

(35) 「もっと早く気がつくとよかった {のに/*くせに} ね」
(渡る)

「ノニ」と「クセニ」の相違は、意味や含意にあることも事実であるが、ここでは両者の前件に現れる話者の心的態度の相違について検討する。「ノニ」と「クセニ」の前件には次の三つの統語的な相違が見出される。

(1) 「クセニ」では前件と後件の述語の主語が同一人物でなければならないが、「ノニ」にはそのような制限がない。

下記の文(r)においては、前件と後件が同一主語であり、「ノニ」も「クセニ」も許容される。

(r) あいつは毎日働いている {のに/くせに} (あいつは) 金がない。

しかし、前件と後件の主語が異なる次の(s)においては、「ノニ」は許容されるが「クセニ」は許容されない。

(s) あいつは毎日働いている {のに／*くせに} 会社は給料を払わない。

これは、「クセニ」が、前件の主語である主体が行った動作や状態から予想して、「そうなるはずだ」と推測・予想される結果を、同一主体者が実現しなかったという非難や反発に用いる文であることに拠る。

「ノニ」「クセニ」の前件の第二の統語的な相違は、次のようである。

(2) 「クセニ」の前件の主語には自然物や無生物が来ることはないが、「ノニ」にはそのような制限がない。

したがって、次の(35)～(37)の「ノニ」文は「クセニ」に置き換えることはできない。

(35) 「あれから一週間も経った {のに／*くせに}, まだ考えつかないの。」 (美味)

(36) 「それになんて汚い空気なんだろう。雲ひとつなく晴れている {のに／*くせに}, 空は霞んでいる～」 (美味)

(37) 「～知り合いのホームパーティなんかもっとあればいい {のに／*くせに}。」

(婦人)

ただし、次の(38)のように、「クセニ」の文においても、文意に部屋の持ち主である人物を示唆して、その持ち主を非難する意図から無生物が主語になることはある。

(38) 部屋は広くせに、物をごちゃごちゃ置いているからいつも狭く見苦しい。

第三には、「ノニ」と「クセニ」には次のような相違がある。

(3) 「クセニ」の前件の述語部分には、「～ {バ/タラ/ト} イイ」のような話者の当為判断や、「ネバナラナイ」(義務), 「～ (テ) ホシイ」(願望), 「ラシイ」(推量), 「ハズダ」(推意判断), 「ワケダ」(当然の帰結を表す) などのいわゆる陳述性の強い話者の気持や判断を表す助動詞や助動詞的表現は現れにくい。

6.2 「クセニ」前件述語と話者の心的態度

以下の(39)～(43)では、「ノニ」は自然文として成立するが、「クセニ」では不自然な文となる。

(39) 「ネバナラナイ」(義務)

a. 「～みんな、結婚したい気持ちは一緒なのに、まったく違うほうを見てる。本当は、価値観の合う人を決めなければいけない {のに／*くせに}」 (婦人)

b. 「確かになあ……もう若くはないんだなあ……うんとがんばって、仕事をしなくちゃ いかん {のに／*くせに} なあ。」 (美味)

(40) 「タイ」「ホシイ」(願望)

a. 「あの日は酔わないで話したかった {のに／*くせに}, 意志薄弱で、見苦しく赤い顔をして、～。」(君を)

b. 向田さんと別れた後も、僕はこの仕事を続けていかなければならない。年をとったときの僕も書いてほしかった {のに／*くせに}。

(39)の「ネバナラナイ」と(40) a 「タイ」においては、前件の事柄の主語を、第三者と見なし

た客体的な事柄として受け止める場合には、「クセニ」を用いることがあるかもしれない。

(41) 「ラシイ」(推量)

「～二人で海外旅行までした仲だったらしい {のに／*くせに}、突然、坂口のヤツがりさと婚約したわけだ」 (想い出)

(42) 「ハズダ」(推意判断)

「それが名前を聞いたはずな {のに／*くせに} 忘れてしまったの。」 (美味)

(43) 「ワケダ」(当然の帰結を表す)

「(俺が) そんなに稼ぎがいいわけでもない {のに／*くせに} 遣り繰りは大丈夫なのかい？」 (盲目の)

b. 「いやいやたいしたことをしたわけでもない {のに／*くせに}, こんなに盛大に歓送会を開いて頂いて恐縮です。」 (美味)

6.3 「クセニ」に置き換えられない「ノニ」

「クセニ」は非難・反発の意を表す表現であり、上述の(43) bのような謝辞の意を表す時に用いられることはない。その点「ノニ」は、前件と後件内容のずれから生じる状況に対して、(43) bのように評価的な意外感を表すこともある。

上の(39)～(43)の文において「クセニ」が使用できないのは、前件と後件の述語の主体が異なっていることに拠ると考えられる。例えば、下記の(t)(u)において、

(t) 「あんなやつ、帰ったらよかったのに (帰らなかった)」

とは言えても、

(u) 「あんなやつ、帰ったらよかったくせに (帰らなかった)」

とは言えない。これは(u)では「クセニ」の前件と後件の主語が同一主体であるという規則が破られていることに拠る。前件で「～たらよかった」と判断しているのは話者であるが、後件の述語「帰らなかった」の主体は「あんなやつ」である。つまり、「陳述性の強い表現は一般に、前件の主体を素材主体から表現主体へと移動させてしまうことによって前件後件同一主体の原則をくずすため、「(の) くせに」「(の) くせして」にはそぐわないのである。」(松木・森田1989: 160～163)

概観してきたように、「クセニ」の前件には、仮定・推量・願望などが現れにくく、既に確定した事柄が現れる。したがって「ノニ」に見られるような仮定に基づいた不満・非難は次の(44)(45)のように「クセニ」では表しにくい。

(44) 「えっ？決定的な夜だったの？そう言ってくればいい {のに／*くせに}」

(ベッド)

(45) 「人間もカタツムリみたいに、生まれたときから体に家がついていれば、家をさがす手間がなくて便利な {のに／*くせに} ねえ。」 (美味)

「クセニ」は一人称に使うことは稀である。一人称に使用する場合でも、自分を客体化して次の(46)(47)のように自分の欠点を卑下したり自嘲したりする場合である。

(46) 澤地：「私なんか見ていると、あなたはお料理も上手だし、気働きもいいし、いい奥さんになって、仕事も続けられたと思うけれど。」

向田：「うーん、それはだめだったと思う。ズボラなくせにわがままなところがあるから、両立はできなかつたでしょう。」 (向田)

(47) 「だからって」と女はいった。「だからって独りがいいっていうんじゃないの。独りは嫌なの。淋しいの。～淋しいくせに、誰も選びたくないの。～」 (丘の上)

7. おわりに

前件と後件の意味関係で見る時、〈否定的累加関係〉〈否定的継起関係〉〈対比的関係〉のいずれにおいても「ケド」「ノニ」「クセニ」の使用は認められる。それぞれの相違は、前件と後件が結ぶ論理関係の違いによって、「ケド」は典型的には二つの事柄の順当な共存が否定されるものとして話者に関係づけられる場合である。それに対して「ノニ」「クセニ」は、前後件の推論的条件関係が不成立に終わったとの話者の判断が述べられて、自己の論理性を否定された無念さが文脈の上で不満や非難といった含意となって表出する場合である。

「ケド」の前件の述語に「ダロウ」が現れるのは、「ノニ」「クセニ」と異なる点であるが、意味の面から考えるなら、この「ダロウ」は〈否定的累加関係〉に顕著であり、話者が前件で提示する見解についての述べ方への態度・判断に関わっている。話者の見解の提示は、「ダロウ」によって、断定を回避した推量的、婉曲的表現として示されやすいと指摘することができる。

「ノニ」と「クセニ」は、推論的条件関係の不成立という面で、予測・予想に反する現実結果への様々な含意を表すことでは同じであるが、話者の態度・判断の文での現れ方は異なっている。含意については文脈の中でさらに吟味される必要がある。「ノニ」と「クセニ」の前件に「ダロウ」が使用できないのは、両者が事実認定に基いて、後件において結果判断が成される文だからである。

紙幅の都合により、前件と後件の意味関係については、本稿では、上記三つの否定的関係の中でしか言及されていない。前件での予測に反した後件の実現の不成立についての内容には、さらに述べるべきことがあると考えるが、後日に機会をゆずりたい。

〈注〉

- 1) 「ケレド」「ケレドモ」「ケドモ」などがあるが、「ケド」に一括して扱う。
- 2) 「クセニ」は名詞の「癖」と逆接の確定条件を示す接続助詞とが結びついたもので、場合によっては接続助詞の一群に入れない場合もあろうが、「接続助詞とは……事がらと事がらとの間に因果関係や継起の関係を認めて、これを話し手の立場から表現したもの」(阪倉1979:288)などの内容に該当するところから、本稿では「くせに」を接続助詞として取り扱う。
- 3) 前後件を否定的に関係付けるという捉え方は佐竹(1986)を参照。
- 4) 佐竹(1986:174)「〈否定的累加関係〉は〈(Xハ) Pデアル〉に続いて〈(Xハ) Qデモアル〉あるいは〈YモPデアル〉という展開があるときのPとQ,あるいはXとYの否定的関係に注目して、両者を関係づけるもの」。
- 5) (j)が文として成立するのは反語文としてであり、疑問文としては成立しない。疑問詞と共に用

いられるのは、「ノダロウ」の場合であり、断定判断を表す「ノダ」を伴った場合だけである。

(例) どうして/いつ みんな来るのだろうか

6) 〈文末「のに」文〉とは、本来「のに」に後続するべき後件が続かず、文末が「のに」で終わる文である。詳しくは、原田 (1997: 53) を参照。

7) 次のような「～トイウ」は、「ノニ」へは接続するが「ケド」には接続しない。

(例) 「せっかく別居できるいいチャンスだっていう {のに/*けど} がっかりしちゃった」

(渡る)

参 考 文 献

- 今尾ゆき子 (1993) 「「ノニ」の機能」名古屋大学『人文科学研究』22
 (1994) a 「条件表現各論——ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ——談話語用論からの考察——『日本語学』vol. 13 明治書院
 (1994) b 「「ケレド」と「ノニ」の談話機能」『日本語教育論集 世界の日本語教育』4号 国際交流基金日本語国際センター
- 岩澤 治美 (1985) 「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号
- 尾上 圭介 (1997) 「認知言語学と国語学の対話——モダリティ、主語をめぐって——」第6回CLC 言語学集中講義の冊子
- 北原保雄他編 (1981) 『日本文法辞典』有精堂
- 阪倉 篤義 (1979) 『日本文法の話』教育出版
- 佐久間 鼎 (1983) 『現代日本語の研究』くろしお出版
- 佐竹久仁子 (1986) 「「逆接」の接続詞の意味と用法」『論集 日本語研究 (一) 現代編』明治書院
- 寺村 秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第Ⅱ巻くろしお出版
- 西原 鈴子 (1985) 「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56号
- 仁田 義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 芳賀 綏 (1978) 『現代日本語の文法』教育出版
- 原田 登美 (1997) 「〈「のに」文〉の諸相——特に後件情意文をめぐって——」『言語と文化』甲南大学 国際言語文化センター
- 松木正恵・森田良行 (1989) 『日本語表現文型』アルク
- 前田 直子 (1994) 「条件表現各論——テモ/タッテ/トコロデ/トコロガ——」『日本語学』vol. 13 明治書院
 (1995) 「ケレドモ・ガとノニとテモ——逆接を表す接続形式——」『日本語類義表現の文法』下 くろしお出版
- 南 不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 森田 良行 (1988) 『日本語の類意表現』創拓社
 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山 卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺 認識的ムードの形式をめぐって、内容判断の一貫性の原則、コミュニケーションにおける聞き手情報」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 渡部 学 (1995) 「ケド類とノニ——逆接の接続助詞——」『日本語類義表現の文法』下 くろしお出版

《用 例 出 典》

(思い出) = 内館牧子『思い出にかわるまで』, (丘の上) = 山田太一『丘の上の向日葵』, (岸边) = 山田太一『岸边のアルバム』, (君を) = 山田太一『君を見上げて』, (遙か) = 山田洋次『遙なるわが町』, (美味) = 雁屋哲『美味しんぼ』, (婦人) = 『婦人口論』1996, 9, (ベッド) = 『ベッドのおとぎばなし』森瑶子, (向田) = 向田邦子『向田邦子全対談』, (盲目) = 内田康夫『盲目のピアニスト』, (渡る) = 橋田壽賀子『渡る世間は鬼ばかり』